大学と緊密に連携しながら良医の育成をめざす全国で唯一の医科大学附属高校の魅力

川崎医科大学附属高等学校は、全国唯一の医科大学の附属高校として、1970年に川崎医科大学と同時に開校。高校と大学の一貫教育を通して知・徳・体のバランスのとれた良医の育成を目指しており、医学部への進学率は実に90%以上にのぼる。その教育の強みについて新井和夫校長に伺った。

医学部受験に特化したカリキュラムを導入

川崎医科大学附属高等学校の最大の特色は、川崎医科大学への特別な推薦入試制度が用意されていることだ。生徒は全員、医師を目指して入学しているため、医学部受験に特化した教育を行うことができる。

「高1から理系のカリキュラムを導入し、数学、英語、理科の時間数を多くしています。特に理科では、物理、化学、生物の3科目を必修とし、医学部進学を見据えた学習指導を行っています」と新井和夫校長は語る。

しかも、同校の入学定員は35名で、実際の入学者は例年25名前後。徹底した少人数教育が可能で、科目によってはチームティーチングや習熟度別授業も導入している。こうしたきめ細かな指導が、医学部受験に必要な学力を伸ばしているのだ。

しかし、医師に求められるのは、高い学力だけではない。医師は病院や地域のなかで、他の医療従事者や福祉関係者と連携してチーム医療を主導することが期待されている。その人材育成のため、同校は全寮制だ。「寮生活を通して、コミュニケーション能力を高め、他者と協働していく力を身につけることができるからです。また、医師に求められる主体的に学ぶ姿勢を育む場としても最適な環境だと思います」（新井校長）

川崎医科大学 福永 仁夫 学長　川崎医科大学附属高等学校 新井 和夫 校長

医学部進学後に役立つ高大連携プログラムを設定

附属高校の強みを生かした、川崎医科大学との連携教育も大きな魅力といえる。その代表的なものが「ドクターロード」と呼ばれる高大連携プログラムだ。川崎医科大学附属病院で最先端医療の一端に触れる「附属病院見学」や、医学研究の実際を経験する「医科大学体験実習」、附属病院の「医師へのインタビュー」、「テーマスタディ」などで構成されている。

「川崎医科大学には、研究マインドを養成する『医学研究への扉』という科目があり、オックスフォード大学で研究活動を行った本校の卒業生もいます。『テーマスタディ』は、そうした研究活動の基礎的なスキルを身につけるもので、医学部志望の学生には非常に有意義な教育だと考えています」（新井校長）

こうした高大連携をスムーズに進めるため、高校と大学の担当者が頻繁に連絡を取り合って、常にカリキュラム内容について相談・検討を行っている。だからこそ緊密な連携が取れ、効果的なプログラムになっているのだろう。

川崎医科大学の福永仁夫学長も「ドクターロード」について、「見学から始まって研究を行い、発表するという一連の流れでプログラムされているため、まさに将来を見据えた教育になっていると思います」と、同校の取り組みを評価している。

テーマスタディ

医科大学体験実習

附属病院見学（ドクターヘリ）

卒業生に聞く！

医師という目標を常に確認できた

川崎医科大学附属高等学校の高大連携プログラム「ドクターロード」は、どのようなメリットがあるのだろうか。2018年3月に同校を卒業し、現在川崎医科大学4年生の吉田智洋さんに振り返ってもらった。

上：現代医学教育博物館見学
下：メディカルスクール・アワー

医師になることへの具体的なイメージが湧いた

――「ドクターロード」は、1年生の1学期に行われる「現代医学教育博物館（MM）見学」からスタートします。どのような内容ですか。

吉田　博物館には臓器の模型が展示してあったり、病気の仕組みを一般向けにわかりやすく解説してあったりしますが、それらを見て自分が興味を持ったテーマを調べて、レポートにまとめます。おかげで、医学部に進学してからの勉強が具体的にイメージできました。

――同じ1学期には、「医師へのインタビュー」もありますね。

吉田　自分であらかじめ質問したい内容を考えていき、附属病院の医師に1対1で質問させていただけるものです。事前学習として、地元の新聞記者の方にインタビューの仕方や、聞いた内容のまとめ方などを教わったうえで、1時間のインタビューに臨みます。1年生ですから医学の専門的な質問はできず、正直、何を聞いたか覚えていませんが（笑）、白衣を着て颯爽と入って来られた姿を見て、医師になりたいという覚悟がさらに強くなったのは事実です。

――2学期になると、「メディカルスクール・アワー」が始まります。

吉田　僕たちが川崎医科大学に行って、大学の先生から講義を受けるものです。先生によってはご自分の手術のときの映像を見せてくださることもあります。最先端の医学や医療に触れられる機会でもありますし、医学の幅広さも実感できました。高校とはまったく違う環境で、しかも普段習っている教科とはまったく違う内容を学ぶことで、早く大学で勉強したいという気持ちが強くなりました。

定期的に医学に触れることで日々の勉強の励みになった

――2年生になると、実習も始まります。

吉田 智洋 さん

吉田　「医科大学体験実習」ですね。2～3人が1組となって、大学の基礎医学の研究室を訪問し、大学の先生にご指導いただいて、2日間実習を行います。僕は生理学教室に配属され、高校生でも理解できるような『心臓のしくみ』をテーマにした実習を体験させていただきました。研究室で行われている研究の一端に触れることができたように思います。驚いたのは、医学部の研究室には、理学部出身など、医師ではない研究者も所属していることでした。こういう基礎研究の上に医学が成り立っているのだということが実感でき、医師は患者さんを治すだけではなく、こうした基礎研究にもしっかりと向き合うことが必要だということがわかりました。

――「附属病院見学」や「総合医療福祉施設『旭川荘』研修」で感じたことを教えてください。

吉田　「附属病院見学」では、川崎医科大学総合医療センターの開院の年に当たっていたため、内覧会のような形で、病院の隅々まで見学ができ、手術支援ロボット「ダヴィンチ」などの先端医療機器を見せていただいたことで、将来の自分の職場についてより明確にイメージすることができました。「旭川荘研修」では、障害のある方と接することで、患者さんに寄り添う大切さや、コミュニケーションの重要性を、より深く考えるようになりました。

――「テーマスタディ」は1年間のプログラムですね。

吉田　自分たちでテーマを設定し、調べて発表するという授業です。僕は心理学をテーマに、同級生に協力してもらって実験を行い、データを集めて分析しました。最後はポスター発表を行いますが、わかりやすく説明することの大切さも痛感できました。研究の手順を体験することができたこの経験は大学での「医学研究への扉」につながっています。

――最後に「ドクターロード」の魅力を教えてください。

吉田　早くから医学、医療、現場で働く医師の姿に触れられることが何よりも大きいと思います。医師になりたいという目標を持って入学はするものの、目の前の勉強をこなしているだけだと、なかなかモチベーションが上がらないこともあります。しかし、「ドクターロード」で自分の目標を繰り返し確認できるため、日々の勉強の励みになります。しかも、医学部での勉強にもつながるスキルも身につけることができる、他の学校にはない素晴らしいプログラムだと思います。

本記事は『日経ビジネス／日経トップリーダー特別版 SUMMER.2021〈メディカルストーリー教育特集号〉（日経BP社）』に記事体広告として掲載されたものです。